

ドレッサージュホースに育てよう!

踏歩変換（フライングチェンジ） パート I

LクラスからMクラスへレベルアップする際に、新たに加わる難しい運動として挙げられるのが《踏歩変換（フライングチェンジ）》です。そしてこの運動は、どのように調教すべきか明確に記されていることが少ないとも言えるでしょう。なぜなら、「左右の脚を入れ替えればできる!」「体重移動だけで簡単にできた!」「行きたい方向に進めば勝手に馬が覚えた!」なんてこともあり得るからです。

しかし馬場馬術では、これらの事象を全て騎手の意思と扶助によって行われるようにしなければなりません。踏歩変換（フライングチェンジ）を調教する場合、様々な反応をする馬に対してこちらがどう対応するべきかを考えておかなければなりません。以下考えられる馬の反応をまとめてみます。

○ 踏歩変換の調教上での失敗パターン集

- ① 騎手が変換の扶助を出しても何も反応しない
- ② 騎手が変換の扶助を出すと、前肢だけ入れ替えて、後肢は変換しない
- ③ 騎手が変換の扶助を出すと、後肢だけ入れ替えて、前肢は変換しない
- ④ 騎手が変換の扶助を出す前に、馬が緊張して駈歩がバラバラになる（前肢 or 後肢どちらかだけ先に変換）
- ⑤ 騎手が変換の扶助を出す前に、馬が緊張してハミに向かって突き出し、走り出す
- ⑥ 騎手が変換の扶助を出すと、止まる、もしくは一旦速歩になり変換する
- ⑦ 騎手が変換の扶助を出すと、扶助から1歩以上遅れて反応し変換する（前肢 or 後肢どちらかだけ変換 or 正しい踏歩変換）
- ⑧ 騎手が変換の扶助を出すと、飛び跳ねたり後肢を蹴り上げたりして反抗し変換しない



これらの事象以外にも色々なパターンが考えられます。ちなみにオースミレブンは、踏歩変換調教初期は①、その後数日で②へ、そして④になり、⑦だったり、時に⑧……という荒れた感じになることもありました。馬にとっては、求められていることが把握できなければ当然できるはずはありません。こうした時の騎手の対応力によって、馬は踏歩変換を理解していきます。

○ 踏歩変換の調教扶助

踏歩変換を調教する際、騎手が行うべき扶助を明確にしておく必要があります。既に踏歩変換を調教され扶助を理解している馬は、騎手の脚をスライドして入れ替えたり、体重移動したりするだけでも踏歩変換の反応を示すようになります。しかし、踏歩変換の扶助を知らない馬は何を要求されているかわかりません。以下、踏歩変換をするための①準備、②扶助、③タイミング、④練習パターンについてまとめてみます。

① 準備

ベースの駈歩

まず、踏歩変換をする前に単純踏歩変換（シンプルチェンジ）を確実にできることが必要です。私は、「シンプルチェンジなんて、フライングチェンジとはまるで別物! 繋がらないよ～」と思っていました。しかし、みなさんは自信を持って確実にシンプルチェンジができると言えますか? シンプルチェンジをするには、駈歩から常歩に移行しなければなりません。そのためには、収縮した駈歩が移行の準備として必要になります。ゆっくりとした、でもパワフルな収縮駈歩を馬と共に生み出していることが必要です。ただ駈歩から唐突に常歩に移行することとは違います。騎手の半減却（ハーフホルト）によって生まれる収縮駈歩です。まずはこの収縮駈歩が必要です。これが、踏歩変換のベースとなる駈歩になります。

なぜこの駢歩でなければならないのか？ 競走馬のように全速力で走っていても踏歩変換はできます。確かに、ゆっくりとした駢歩で踏歩変換をしない馬が、全速力で走って実施すればできる！なんてこともあります。そのような“きっかけ”を作ることもあります。しかし、ゴムまりのように弾んでいる収縮駢歩から、騎手の扶助にしっかりと馬が反応して実施することが馬場馬術では求められています。また、収縮駢歩こそ踏歩変換を実施しやすい動きで、馬が出された扶助を考えて実行する時間の余裕がある動きだと捉えることもできます。

※参考資料

馬名	産地	踏歩変換 調教開始年齢	単発踏歩変換 習得期間(左右共)	連続踏歩変換 最終調教レベル	問題点
ホワイミー	ドイツ	5歳	1ヶ月	1歩毎	尻跳ね
ヴォルティガー	ベルギー	7歳	10ヶ月	2歩毎	左→右へ
スイングユタカ	浦河	8歳	6ヶ月	1歩毎	左→右後肢遅れ
トレジャーハント	遠野	5歳	1週間	1歩毎	右→左小さい
ゴールゲッター	釧路	4歳	8ヶ月	1歩毎	後肢遅れ
タイキラファエロ	浦河	11歳	2ヶ月	1歩毎	後肢遅れ
ディ・ルカ	オランダ	5歳	10ヶ月	2歩毎	左→右変換せず
オースミイレブン	浦河	8歳	6ヶ月	?	右→左不正駢歩

この表は、私が未調教から踏歩変換をした馬たちの調教期間を比較したものです。ご覧の通り、馬により反応と習得期間が様々であることが分かります。何度も諦めようか……と思うこともあった馬たちもいます。かと思えば、既に調教されていたかのように直ぐに習得する馬もいます。我々が正しく扶助を出し導いていくことによって、どんな馬も踏歩変換ができるようになる！と信じて継続することが大切です。しかし、それはあくまで我々が正しく騎乗しているということが前提です。

今回は、《②扶助》以降の項目について考えていきたいと思います。